

病理診断部

1. スタッフ（平成29年4月1日現在）

部長（教授）	福嶋 敬宜
副部長（准教授）	大城 久
医員（教授）	仁木 利郎（兼務）
	田中 亨（兼務）
（准教授）	松原 大祐（兼務）
（講師）	河田 浩敏（兼務）
（講師）	吉本多一郎（兼務）
（学内講師）	仲矢 丈雄（兼務）
（助教）	天野 雄介（兼務）
（助教）	木原 淳（兼務）
シニアレジデント	4名

技師（副技師長）	芳賀 美子（兼務）
（主任）	鈴木 智子（兼務）
（主任）	本望 一昌（兼務）
（主任）	二階堂貴章（兼務）
ほか、技師	12名、事務員 2.5名

2. 病理診断部の特徴

病理診断部は、自治医科大学附属病院の中央施設部門に属し、自治医科大学附属病院および一部さいたま医療センター（腎生検の電子顕微鏡検索用検体）で採取された検体について生検診断、細胞診断、術中迅速診断、外科切除検体の病理診断、および剖検診断などを行っている。

病理診断部では、提出されたすべての検体について病理医による適正な標本処理、必要十分な切り出し、病理検査技師による質の高い標本作製を行い、最終的に病理診断専門医による顕微鏡標本の観察、ダブルチェック過程を経て病理診断報告（電子カルテ上）を行っている。

また、必要に応じて免疫組織化学的検索、蛍光抗体法、電子顕微鏡検索、PCR解析を行い、複数の病理医による相互チェックを経て病理診断報告書を作成している。

診療における病理診断の関与が特に大きい呼吸器、消化管、胆膵、乳腺、口腔・耳鼻科系などを中心に、臨床病理合同カンファレンスを行う他、卒後臨床研修センターに協力して共同で病院CPC（年3回）を行うなど、病院の診療レベルの向上に寄与している。

病理診断部は、医学部教育の一部も担当し、臨床病理カンファレンス（CPC）（M4）全15回を行い、必修BSL（M4）、選択必修BSL（M5,M6）の学生も受け入れている。

また、消化器内科からの希望で、医師1名を週1日、病理診断研修のために受け入れている。

さらに、各科の研究支援の一環として、病理パラフィンブロックや組織スライドガラス標本の貸し出しや管理

を行っている。

なお、病院機能評価（2015年受審,2016年結果通知）の最終審査結果で、当病理診断部は、最高位の「S（秀でている）」の判定を戴いた。

- ・施設認定
日本病理学会認定施設
臨床細胞学会認定施設
- ・認定医
日本病理学会専門医：福嶋 敬宜 ほか9名
（内、口腔病理専門医1名）
臨床細胞学会専門医：福嶋 敬宜 ほか8名

3. 実績・クリニカルインディケーター

1) 病理診断件数の動向：

平成29年における組織診断は15,012件、細胞診は18,927件、術中迅速組織診断は831件、電顕279件、剖検診断は42件である。昨年に比べ細胞診、電顕、剖検が微増、組織、迅速診断が微減であるが、ほぼ横ばいといってよい動きである。剖検数は、実績として診療科によっては専門研修医の採用定数とも関連することから病院全体の問題として捉えてもらい、複数回のアナウンスを行ったことも影響していると考えられる。免疫組織化学検査件数は、5年前に比べると1.6倍であり、この間、ほぼ直線的に増加し、依然増加中である。細胞診は、5年前と比較して泌尿器検体（2,059→2,647件）、消化器（306→409件）、体腔液検体（1,265→1,871件）などの件数の増加がやや目立つ。

2) 部門統計（2016年）

■病理組織診断件数：	15,012件
標本ブロック数	62,480個
ヘマトキシリン・エオジン標本	123,812枚
特殊染色	25,446枚
■迅速診断：	831件
ブロック（検体）数	1,590個
■細胞診件数：	18,927件、41,459枚
パパニコロー染色	36,378枚
特殊染色	4,780枚
<検体別の件数>	
婦人科関連	11,248件
呼吸器	1,683件
泌尿器	2,647件
甲状腺	308件
乳腺	269件
消化器	409件

リンパ節	217件
体腔液	1,871件
他	275件
■電子顕微鏡検索：	279件
■免疫組織化学染色：	2,763件
Her2蛋白検査件数：	476件
ER&PR：	426件
■蛍光抗体法検索：	242件
■Insituhybridization法検索：	126件
■FISH法検索：	47件
■病理解剖診断：	42件

3) 病理診断精度管理について：

小手術検体や生検検体の切り出しについては、病理医と臨床検査技師が相互に検体と検査申込書を確認しながら共同で、外科手術検体については病理医が検査申込書を参照しながら行うようにしている。

組織診断報告は、全症例について、講師以上の認定病理専門医によるダブルチェック体制で行っている。

免疫組織化学染色標本は、担当技師と病理医が、毎日、その日のすべての標本について、染色性の妥当性について評価した後で診断医に渡すようにしている。

細胞診は、スクリーナーによりダブルチェックを行い、少しでも異常所見のある標本（クラスII以上）については全ての症例をスクリーナーと認定病理専門医とのディスカッションを経て、最終報告している。

業務改善、インシデント発生防止のために、日常の業務の間に気づいたことを書きこむ「気づきメモ」用紙を準備、その都度、書き留めるようにしている。そこで出された内容は、医師と技師のリスクマネージャーと副技師長がすべてに目を通し、まとめて下記の連絡会で情報共有している。また、毎週木曜日の午前8:20から部長、副部長、副技師長、主任技師による連絡会を行ってその週の予定などの確認や問題点の抽出などを行い、さらに毎月第2週目の木曜日午後5:15からは部長、副部長と技師全員参加による病理診断部連絡会議を開き、検体の流れや業務環境の改善に関する検討などを行っている。さらに、年一回は、各部門の業務実績報告会を行って、病理診断部全体の業務量やその動向などの情報を共有している。

4) 臨床病理カンファレンス

1) 剖検肉眼所見検討会：毎週水曜日午前9:00から、臨床担当医の参加のもと、剖検症例のマクロ所見の検討会を行っている。

2) 剖検症例総合検討会：毎月原則第2・第4水曜日の午後5:00より開催している。

3) 病院CPC（臨床病理カンファレンス）：卒後臨床研修センター主催で年3回ほど病院の全職員を対象とした剖検症例検討会が行われており、症例の選択、病理解剖所見の提示や討論で主要な役割を果たしている。

4) 放射線科・病理カンファレンス：毎週金曜日午後

5:00から放射線科カンファレンス室で行っている。

5) 呼吸器内科カンファレンス：毎週火曜日午前8:00から、病理医が参加し、必要に応じて症例の病理像を解説している。

6) 消化器外科・内科・病理合同カンファレンス：2カ月に1回開催。

7) 乳腺カンファレンス：隔週、火曜日

4. 研究業績（医師以外）

◎学会・研究会発表

1. 飛田野清美：透過型電顕における塗抹標本の転写法（ニーマンピック病疑い症例のマルク塗抹標本）. 第143回電子顕微鏡技術研究会、2016年4月2日、東京

2. 伊藤聡史、松原大祐、鈴木智子、郡俊勝、三登久美子、森田剛平、大城久、福島敬宜：Atypical diagnostic category of bile cytology in pancreatobiliary carcinoma and benign diseases. The 19th International Congress of Cytology, 2016年5月28日-6月1日、横浜

3. 飛田野清美、二階堂貴章、本望一昌、芳賀美子：心筋生検における電顕観察のポイント. 第65回日本医学検査学会、2016年9月3-4日、神戸

4. 郡俊勝、伊藤聡史、柳田美樹、鈴木智子、天野祐介、大城久、田中裕美子、藤田崇史、福島敬宜：乳腺腺筋上皮腫の一例. 第30回関東臨床細胞学会学術集会、2016年9月10日、山梨

5. 飛田野清美、本望一昌、二階堂貴章、山本昌代、中村香織、渡邊温子、星野真紀子、芳賀美子：電顕観察で傍尿細管毛細血管に糸球体同様の病変を認めたSLE腎炎の一例. 第53回関東甲信支部医学検査学会、2016年10月29-30日、山梨

6. 本望一昌、飛田野清美、二階堂貴章、山本昌代、小瀬川順幸、河野哲也、芳賀美子：電顕により足細胞陥入糸球体症が疑われた一症例. 第53回関東甲信支部医学検査学会、2016年10月29-30日、山梨

7. 二階堂貴章、飛田野清美、本望一昌、小瀬川順幸、芳賀美子：右耳後部皮膚に異所性の呼吸器粘膜上皮がみられた希な一例. 第36回栃木県医学検査学会、2016年11月6日、栃木

8. 飛田野清美、佐藤さなえ、星野真紀子、鈴木智子、本望一昌、二階堂貴章、小瀬川順幸：病理検査室における医療安全①新5S活動報告. 第36回栃木県医学検査学会、2016年11月6日、栃木

9. 飛田野清美、佐藤さなえ、星野真紀子、鈴木智子、本望一昌、二階堂貴章、小瀬川順幸：病理検査室における医療安全② 気づきメモの活用. 第36回栃木県医学検査学会、2016年11月6日、栃木

◎その他

1. 飛田野清美・本望一昌・二階堂貴章：電顕検査の基本と実際. 臨床検査部合同勉強会. 2016年1月19日、栃木（自治医大）

2. 小瀬川順幸・二階堂貴章：臨床検査技師の業務-病理解剖の介助-. 臨床検査部合同勉強会、11月15日、栃木（自

治医大)

5. 2017年の目標・事業計画等

1) 業務向上（効率化、迅速化、質向上）

インシデント防止については最も大きな注意をしており、毎月の振り返りや部内での情報共有など行っているが、小さいものは散見される。引き続きインシデントが起りえない作業手順など防止、業務環境改善を図りたい。

2) 次世代自治病理プロジェクト

平成30年春の新棟への移転を前に、将来の病院機能への一層の貢献を目指して、将来のあるべき病理診断部門の姿を考える、「次世代自治病理プロジェクト」を病理診断部内に一昨年立ち上げ、医師・技師混合で具体的な議論を行ってきた。今年は、新棟計画における作業なども一段落となりそうであり、医師・技師ともに若い世代にアピールできる職場環境を目指して話し合いなどを継続していきたい。

3) 病理診断部からの情報発信

病理診断部からの部外への情報発信はホームページ、ニュースレター（PATHO News）によって行っている。今年は、ホームページのソフトの変更などを行って、より魅力的なものに改変していく予定である。ニュースレターは主に学内／院内の関係部署への病理診断業務についての情報提供を目的として行っており、本企画も関係科の方々の理解が得られるように今後も継続していく予定である。

4) 勉強会・カンファレンスの充実

院内各診療科との臨床病理カンファレンスは、臨床各科への情報提供の機会であると同時に、臨床相関についての考察、臨床科との良好な信頼関係の構築そして病理診断の精度向上のためにも重要であり、今後なるべく臨床科の要望には応えて行ける体制を考えていきたい。

昨年新たに、JICHI病理診断セミナーの立ち上げを行った。これは外部講師を招聘し、標本の供覧と講演を行ってもらうものである。関連臨床科からの出席もあり、今後も継続的に行っていくことで、病理診断レベルの向上に加え、臨床各科との診療連携の上でも非常に有益な企画／事業と考えている。